

筑後川

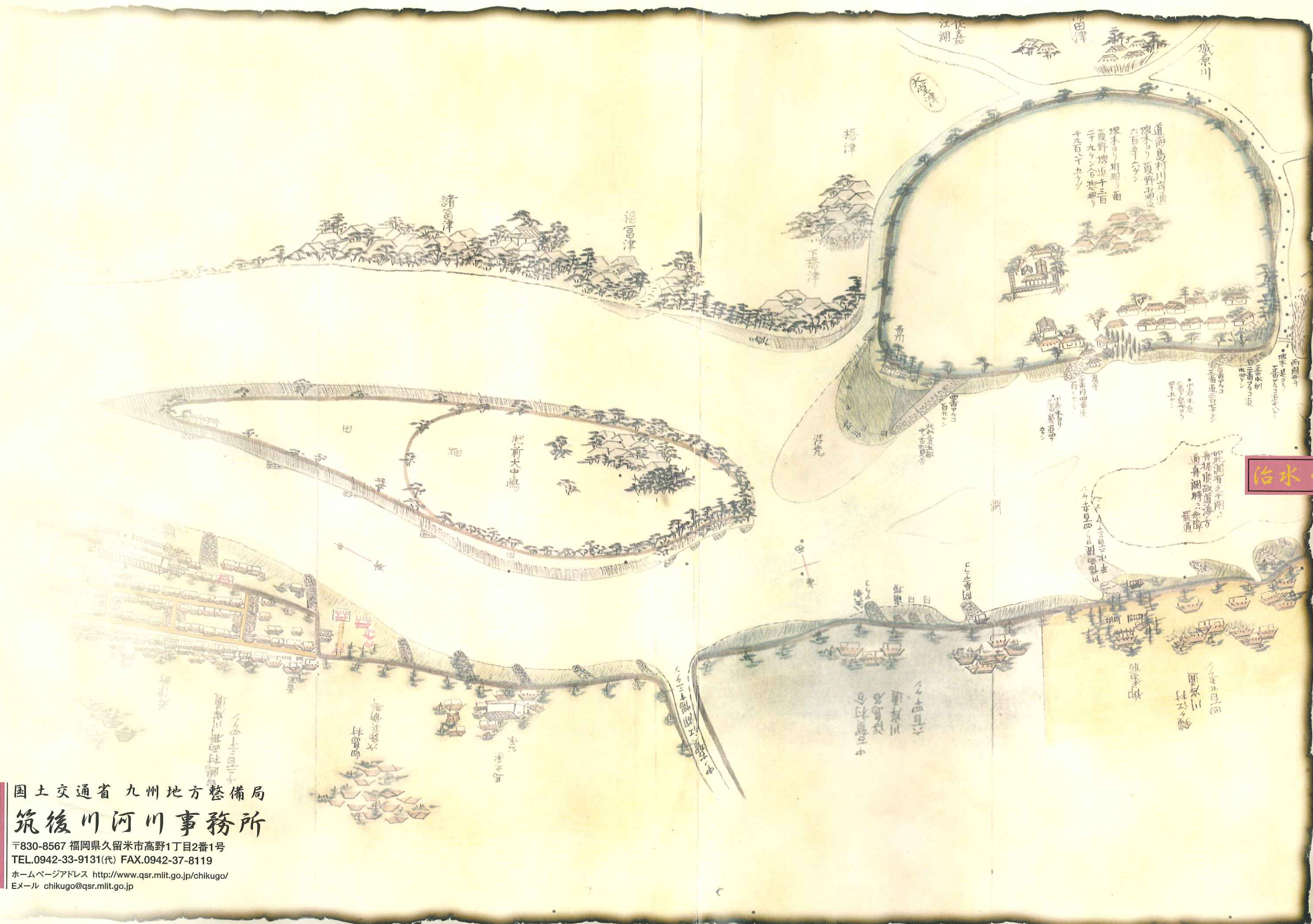
治水・利水編

歴史散策

国土交通省 九州地方整備局
筑後川河川事務所

〒830-8567 福岡県久留米市高野1丁目2番1号
TEL.0942-33-9131(代) FAX.0942-37-8119

ホームページアドレス <http://www.qsr.mlit.go.jp/chikugo/>
Eメール chikugo@qsr.mlit.go.jp





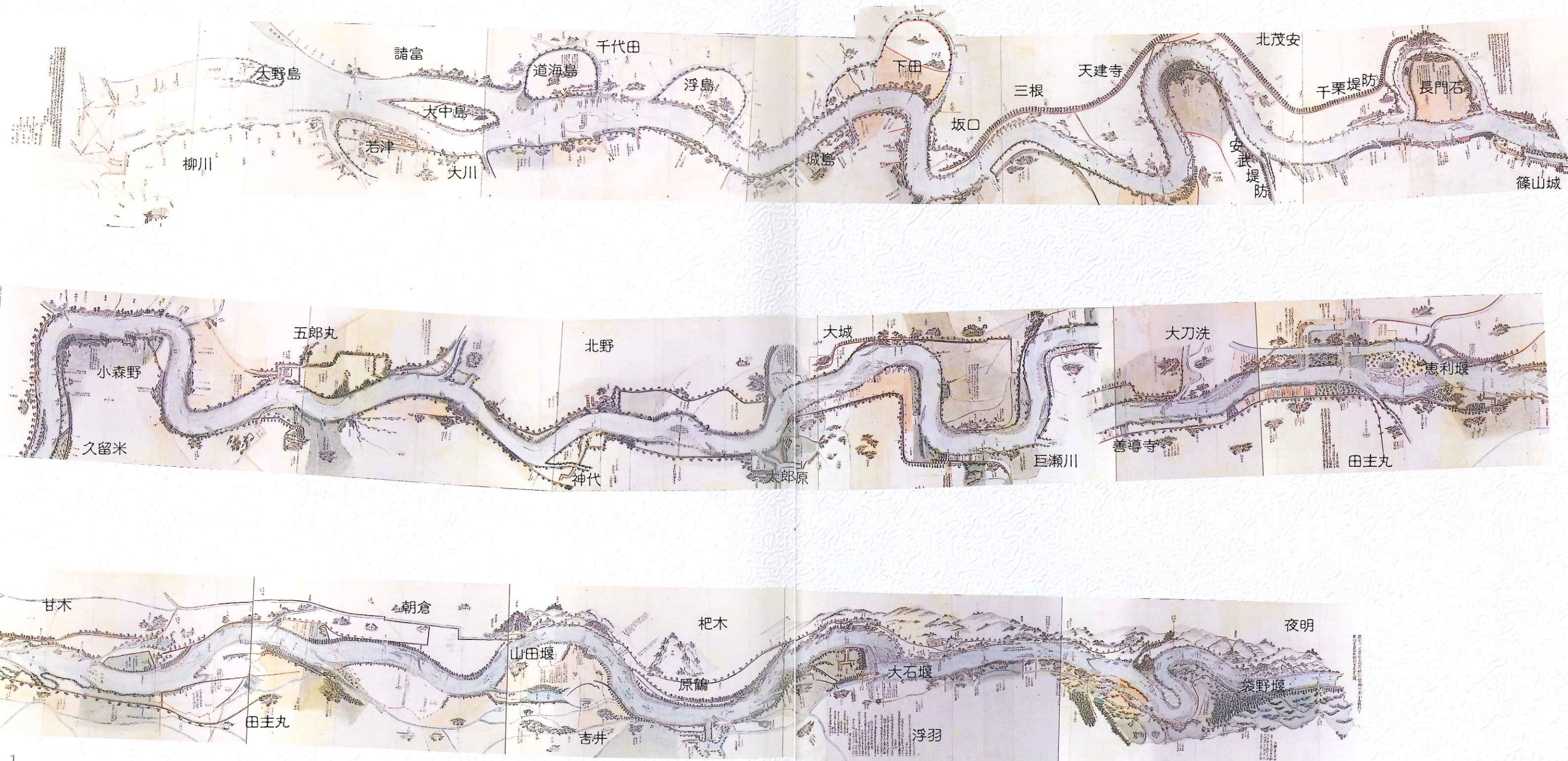
歲月を経て、なお色褪せぬものたり—
雄大な軌跡を描いて流れゆく
九州一の大河、筑後川。

阿蘇の山筋に発した流れは、
津江川、玖珠川など多くの支川を合流し、肥沃な筑後・佐賀平野を通り、
日本最大の干満差と広大な干潟で知られる有明海へと注いでいきます。
母なる流れ筑後川、そこには水と人との悠久の歴史を物語る
さまざまな構造物が、今も静かに佇んでいます。

筑後川古図 文政2年(1819)

肥前藩、柳川藩などの立ち会いのもと公儀の役
人が調査を行った上でつくられた絵図といわれ、
当時筑後川にあった荒籠や水刳、千栗堤防などが
鮮明に描かれています。

※いちばん上の左側が河口です。



筑

後

川



●下田の渡し(平成2年頃)



多くの船が行き交っていた筑後川

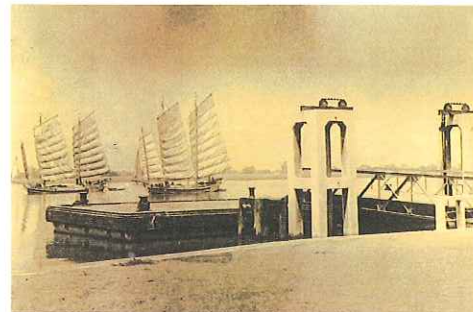
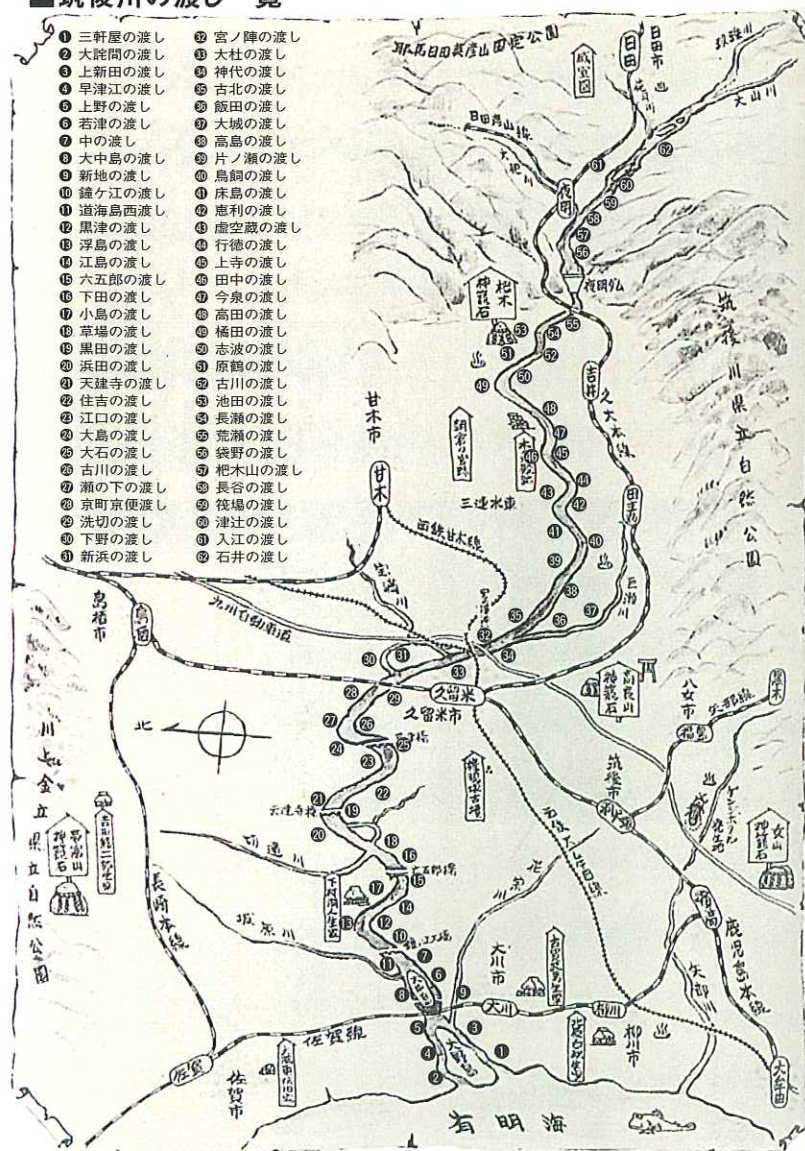
筑後川に橋があまり架けられていなかった時代には、渡し船が各地で見られ、風物詩となっていました。最盛期には62ヶ所もの渡し場があり、長い間重要な役目を果たしてきましたが、やがて橋が各地で架けられるようになり、平成6年下田の渡しを最後にすべてが役目を終えました。



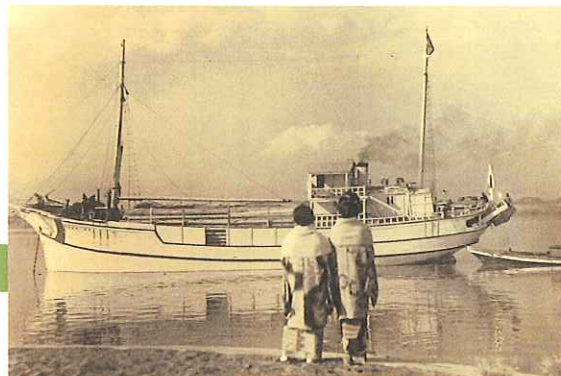
●若津の渡し(昭和31年頃)

■筑後川の渡し一覧

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|---------|---------|---------|----------|---------|----------|---------|----------|---------|---------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|
| ① 三軒屋の渡し | ② 大津間の渡し | ③ 早津江の渡し | ④ 上野の渡し | ⑤ 若津の渡し | ⑥ 中の渡し | ⑦ 大中島の渡し | ⑧ 新地の渡し | ⑨ 鎌ヶ江の渡し | ⑩ 道海島西渡 | ⑪ 黒津の渡し | ⑫ 浮島の渡し | ⑬ 江島の渡し | ⑭ 六五郎の渡し | ⑮ 下田の渡し | ⑯ 小島の渡し | ⑰ 草場の渡し | ⑱ 黒田の渡し | ⑲ 浜田の渡し | ⑳ 天建寺の渡し | ㉑ 住吉の渡し | ㉒ 江口の渡し | ㉓ 大島の渡し | ㉔ 大石の渡し | ㉕ 古川の渡し | ㉖ 瀬の下の渡し | ㉗ 京町京便渡 | ㉘ 洗切の渡し | ㉙ 下野の渡し | ㉚ 新浜の渡し |
| ② 大杜の渡し | ③ 神代の渡し | ④ 古北の渡し | ⑤ 飯田の渡し | ⑥ 大城の渡し | ⑦ 高島の渡し | ⑧ 片ノ瀬の渡し | ⑨ 鳥飼の渡し | ⑩ 床島の渡し | ⑪ 恵利の渡し | ⑫ 虚空蔵の渡し | ⑬ 行徳の渡し | ⑭ 上寺の渡し | ⑮ 田中の渡し | ⑯ 今泉の渡し | ⑰ 高田の渡し | ⑱ 橋島の渡し | ⑲ 志波の渡し | ⑳ 原鶴の渡し | ㉑ 古川の渡し | ㉒ 池田の渡し | ㉓ 長瀬の渡し | ㉔ 寛瀬の渡し | ㉕ 篠野の渡し | ㉖ 杉木山の渡し | ㉗ 長谷の渡し | ㉘ 後場の渡し | ㉙ 津辻の渡し | ㉚ 入江の渡し | ㉛ 石井の渡し |



●昭和初期の若津港



●昭和初期の荷役労働者(若津港)



●いかだ流し(夜明)



●いかだ流し(荒瀬)

かつては舟運が盛んで、下流部には諸富津、若津、蒲田津、早津江津などの河港が栄え、大阪などへ米穀を売りさばく千石船の往来もありました。上流の日田からは杉をいかだに組んで流し、木材の集散地、大川では木工業が発達。しかし物資の輸送の主役が陸路へと変わるとともに、筑後川の舟運は衰退。いかだ流しは、夜明ダムの建設とともに昭和27年12月27日を最後に姿を消しました。



●筑後川を行き来していた千石船

人々の暮らしとともに

筑後川は流域の人たちの生活と深く結びついています。水の利用も古くから行われ、筑後川から水を引くために堰や用水路など多くの利水施設がつくられました。下流部では、クリークが発達し、満潮時に逆流してきた海水で川の表層に押し上げられた淡水（河川水）をくみあげて耕地に水を供給するアオ取水（※P11参照）が行われ、豊かな穀倉地帯を形成。流域の人々に多くの恵みをもたらしてきました。



●人工的につくられた水路、クリーク（諸富町）



●山田堰（朝倉町）



●山田堰からの水を導く堀川用水（朝倉町）



●クリークから水をくみ上げていた足踏み水車



●宮入 供養碑（久留米市宮ノ陣町宮瀬地先）



●宮入 を発見した宮入氏を讃える学塾碑（鳥栖市曾根崎町）

奇病撲滅への長い道のり

筑後川の中流域では、江戸時代から原因不明の奇病が発生していました。原因が突き止められたのは明治時代。日本住血吸虫という寄生虫による病気と判明し、中間宿主である宮入貝の撲滅対策が実施されました。薬剤散布や河川敷整備、水路のコンクリートによる三面張り、宮入貝の生息環境を改変する努力が続けられ、平成2年3月に安全宣言が出され、平成12年3月に対策事業が終結を迎えました。



●薬剤散布による宮入貝の駆除



●高水敷の整備（久留米市豆津地先）

古くから続いてきた洪水との闘い

日本有数の暴れ川としても有名な筑後川では、古くから治水にも力が注がれてきました。藩政時代には堤防や水の流れを変えて岸辺を守る水捌を流域の各藩が争って築きました。また舟運の水深を維持する働きもある荒籠をつくったり、堤防を築くなどの土木工事も行われましたが、自分の国の領地を守ることが目的で、筑後川全体のことを考えたものではありませんでした。川沿いに住んでいる人たちは、万一川が氾濫した場合の避難場所を備えた水屋をつくったり、敷地を堤で囲って輪中にするなど、洪水から暮らしを守るために、さまざまな工夫や努力を続けてきました。



●水流を変えるためにつくられた荒籠



●現在は公園として整備されている千栗堤防跡

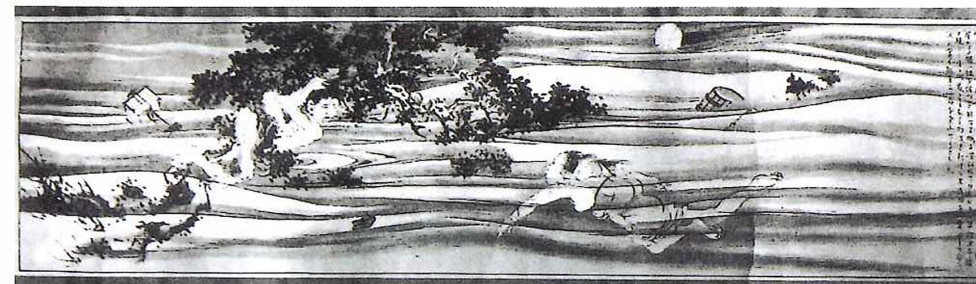


●石積みの上につくられた水屋（鳥栖市安楽寺町）

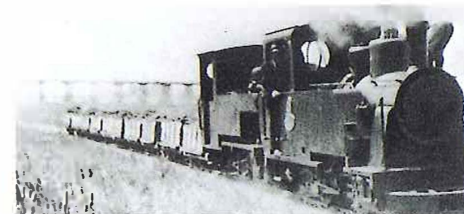


●敷地を取り囲む輪中堤（甘木市長田）

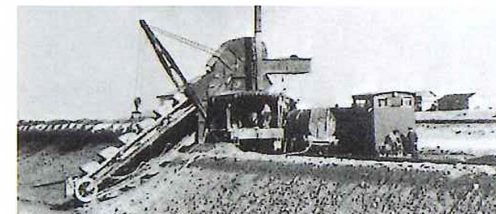
近代的な河川改修の始まり



●明治22年水害の惨状を伝える絵図



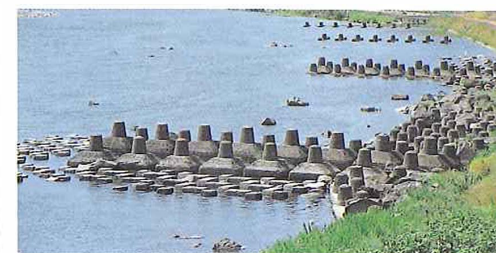
●天建寺築堤で蒸気機関車による土砂の運搬（昭和34年頃）



●坂口捷水路の工事風景（昭和4年頃）



●埤水門（明治34年築造：千代田町）



●昭和30年代につくられたコンクリート製の水制（杷木町）



●昭和28年水害で泥海と化した久留米市街

本格的な治水事業が始まったのは、明治20年。国の直轄事業として着手され、舟運のための低水路工事や洪水を安全に流すための放水路工事が行われました。その後、明治22年の大洪水をきっかけに、築堤や護岸、捷水路、水門整備などが行われ、さらに大正10年、昭和28年の洪水への対応や流域の発展による安全性のさらなる向上を図るために、計画が改められてきました。

筑後川の代表的な歴史的構造物

筑後川の永い歴史の中で積み重ねられてきたさまざまな治水・利水工事。
そこには先人たちの、安全で豊かなふるさとを願う深い思いが息づいています。

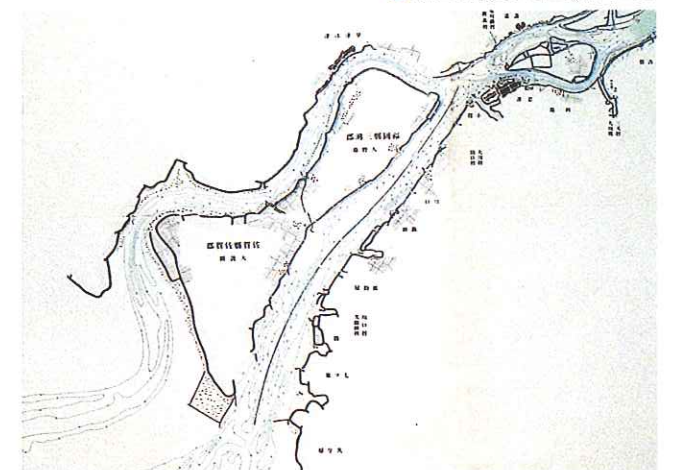
導流堤 (デ・レーケ導流堤)



●新田大橋から上流を望む

「導流堤」は、河口に土砂がたまることを防ぎ、航路(船の通る道すじ)を保つためにつくられた施設で、明治20(1887)年から始まった筑後川の第一期改修工事でつくられました。当時は船が輸送手段の中心で、航路の確保はとても大切なことでした。しかし、有明海の潮の満ちひきが大きいために、筑後川の河口は土砂がたまりやすく、航路がふさがれてしまうこともしばしば。そこで、自然の川の流れだけで水深を維持できるようにと、約6kmにわたる導流堤が築かれました。一般には設計者の名前をつけて「デ・レーケ導流堤」といいますが、地元では「沈礁(ちんしょう)」とも呼ばれています。

デ・レーケ導流堤は明治23(1890)年に、当時のお金で642,055円をかけて完成。100年以上経った現在でも、有明海に流れ込む土砂のコントロールに活躍しています。



●明治36(1903)年の改修図面に描かれた導流堤

デ・レーケの指導によってつくられた施設



日本の川づくりに大きな足跡を残したオランダ人技師
ヨハネス・デ・レーケ

明治政府によって招かれたオランダ人技術者のうちの一人で、明治6(1873)年9月に来日しました。淀川をはじめ木曾川、吉野川など日本各地の河川や港の計画を指導し、明治36(1903)年に帰国するまで30年近くも日本政府の顧問技師として活躍しました。筑後川の第一期改修工事は、明治16(1883)年に筑後川の調査を行ったデ・レーケが翌年に作成した改修計画の原案をもとに、日本人技術者の手で着工されたものといわれています。

■デ・レーケ堰堤(吉野川・徳島県)



吉野川の支川、大谷川につくられた砂防ダム。山から川に流れ込む土砂を調節する施設で、国が直接行う事業としては淀川とともに日本最初の砂防工事として建設されたものです。デ・レーケは、日本の「砂防の祖」ともいわれ、日本各地で砂防施設の整備に功績を残しています。

■木曾三川改修(愛知県)



●改修計画図

デ・レーケが木曾三川の流域を丹念に調査して改修の構想をつくったもので、日本で最初の近代河川計画といわれています。この改修事業は、洪水を安全に流すために、入り乱れていた木曾川、長良川、揖斐川の流れを完全に分ける導流堤を築くなどの大工事、完成までに25年もかかりました。



●大川市道海島付近右岸

川岸から川の中に向かって突き出した石垣のような構造物で、航路（船の通る道すじ）を確保するために水深を保つ働きをはじめ、護岸や干潟の造成、あるいは陸への昇降場といった多くの目的のために設置されたと思われます。多くの荒籠は、明治時代の改修工事で取り除かれましたが、その中には久留米藩がつくった百間荒籠（大川市道海島）、佐賀藩の千間荒籠（川副町大詔間）など大型の荒籠もありました。大きな荒籠は川の流れに影響を与え、対岸の陸地を削るなどの作用があったため、向かい合った藩では荒籠の新設や改修で度々争いを起こしています。筑後川の河口付近から筑後大堰付近まで、また、早津江川や諸富川でたくさん見られます。



●諸富町諸富橋上流右岸

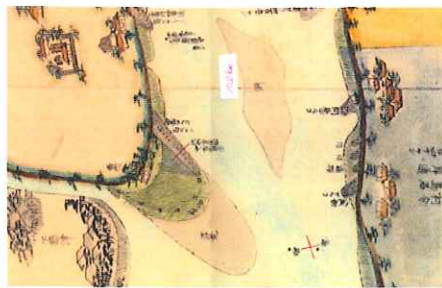


●諸富町諸富橋下流右岸

道海島の百間荒籠騒動



安永6(1777)年に起きた佐賀藩と久留米藩の荒籠をめぐる紛争。久留米藩が明暦2(1656)年につくった大荒籠のために筑後川の流れが佐賀藩側へとそって、佐賀江や三根、神埼周辺は大雨のたびに洪水に襲われていました。佐賀藩は幕府にその困窮を訴え続けていましたが、天明5(1785)年によりやかく裁定がおりて、荒籠の改築が行われ、洪水の脅威から救われました。〔出典：「福岡県百科事典」西日本新聞社〕



●文政2年筑後川絵図に描かれた荒籠

水刈（みずはね）



荒籠と同じように川の流れに変化を与えて河岸の浸食を防ぐもので、強い水の勢いを反対側にはねやる働きから「水刈」と呼ばれます。水刈の川下部分には土砂の堆積や淀みができ、生物にとって好ましい環境が生まれるため、最近では多自然型川づくりに応用されています。

●杷木町昭和橋上流右岸

干拓堤防



●石積みの干拓堤防

陸地を造成するために、外海からの海水の浸入を防ぐようつくられた堤防。筑後川下流域は、ほとんどが干拓によってつくられた土地で、海岸線には時代時代の堤防が残っています。古い時代には、潟の上に竹籠を並べて、その中に土を入れて堤防としました。また、松丸太の杭を打ち込み、粗朶や竹材をからませて堤防の芯にしていました。有明海に面して佐賀平野に約30kmにわたって続いている松土居も、こうした工法でつくられたものです。その後、技術的に大きな進歩を遂げ、江戸時代中期から石垣を使用するようになり、干拓面積も飛躍的に大きくなっていきました。



●昔の干拓の様子

干拓地名の由来

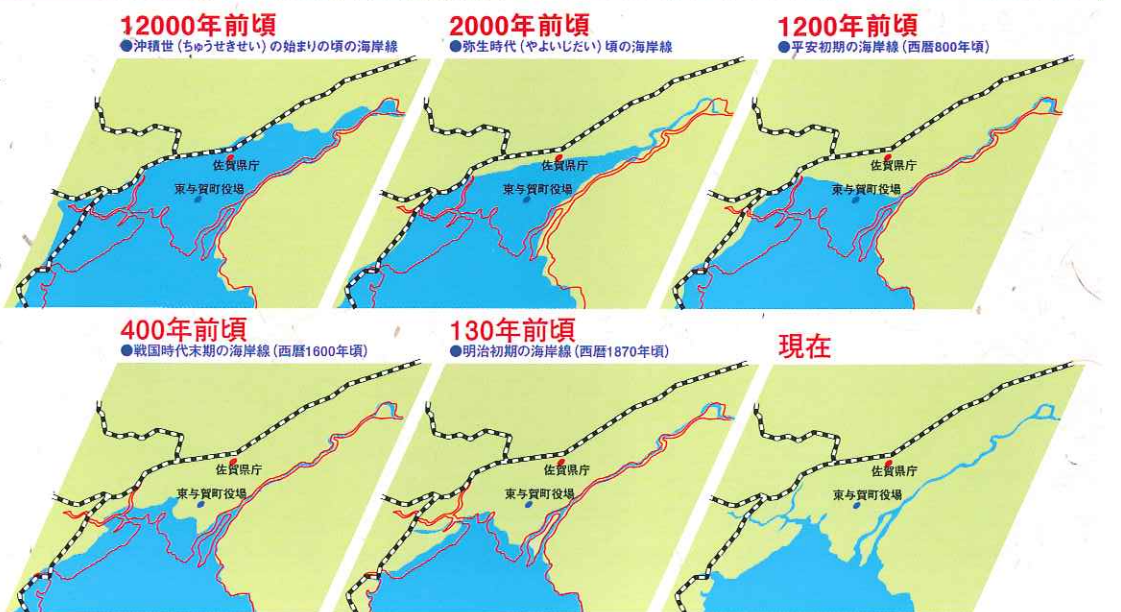
有明海沿岸には、「籠（こもり）」や「棚（からみ）」という文字がついた地名が多く見られます。これは堤防の工法からきた言葉といわれ、籠は竹で編んだ円筒形の籠に土や石を詰めて堤防とするもの、棚は、丸太に木の枝などをからませて、そこに潟が堆積するのを待って潮留めにしたものです。一般に籠は棚よりも内陸部にあり、開発年代が古いといわれています。また、新地や開、割、牟田などの地名も、ほとんどが干拓地の地名です。



●東与賀町に残る松土居の跡

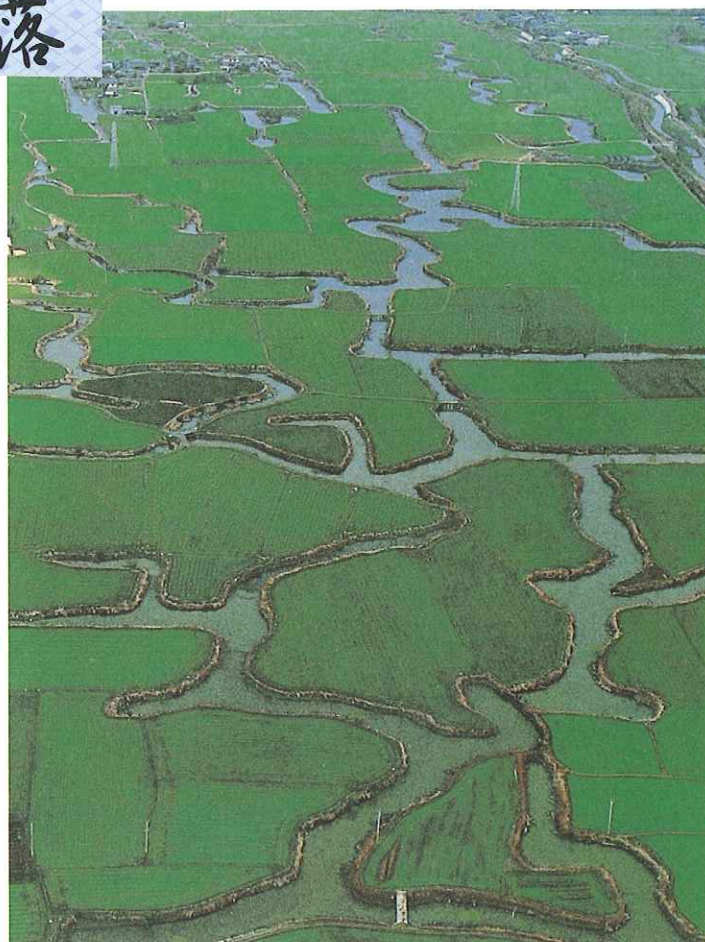
有明海沿岸の海岸線の変遷

沖積世はじめ頃の海岸線は、現在の海岸線から約20kmの背後で、北部は久留米にまで至っていたといわれています。筑後川が運んできた土砂の堆積による自然陸化と営々と続けられてきた干拓によって、現在の海岸線がつくられてきたのです。



クリーク・環濠集落

かんがいや貯水、排水などを目的とした水路で、筑後川下流域一帯に見られます。筑後川は平野部の一番低い所を流れていて、さらに有明海の6mにも及ぶ干満差の影響を受けるため、自然に水を引くことが困難でした。そのため、耕地にくまなく用水を運ぶ人工の水路をつくり、そこへ「アオ取水」で水を導いていました。その水は水道が整備されるまでは、飲料水としても利用されていました。クリークは干潟の滞筋（潮が引いた後に残る水路）がもとといわれ、不規則な形が大部分ですが、一部は大化改新の班田の名残りで、整然としています。また筑後川下流域には、八田江、佐賀江など「江」のつく小河川がたくさん見られますが、これらも滞筋がそのまま水路になったもので、「江湖」と呼ばれています。干潮時には排水路、満潮時には筑後川からアオ（淡水）を導入する用水路の役割を果たしていました。中世には、豪族の根拠地を中心に、クリークを利用した城砦が築かれ、環濠集落を形成。また、クリークを維持するために、独特のクリーク共同体が発達していましたが、近代化によってクリークの存在意義が薄れ、共同体も徐々に崩壊していきました。



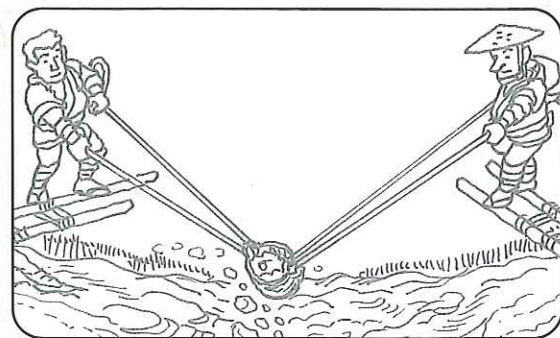
●佐賀平野でみられたクリーク（平成2年頃）



●千代田町直島地区に残る環濠集落

クリークで結びついた暮らし

クリークの貯水能力を保つためには、底にたまった泥をさらえる泥土揚げが必要でした。この泥土は養分が多く、肥料となり、特定個人のものではしたが、作業はクリークからの用水に頼る人たちの共同労働。独特の農業方法から、クリーク共同体が生まれましたが、大正期に入って、動力によるかんがいや化学肥料の普及などにより、共同体は自然に消滅していきました。



●泥土揚げ（ゴミホイ公役）の様子

アオ取水

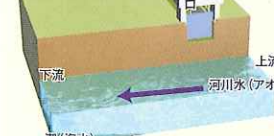
筑後川は有明海の6mにも及ぶ干満の影響を受け、満潮時には海水が川を遡ってきます。このとき、河川の水（淡水）は表層に押し上げられます。この自然現象を利用してかんがいの水を取水するのがアオ取水です。藩政時代、干拓によって耕地面積が増えたため、クリークの水だけでは足りなくなったために、行われるようになったといわれています。この水は、昭和30年代までは飲料水にも用いられました。



●アオ取水をしていた酒見堰

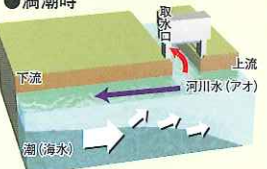
アオ取水のしくみ

●干潮時

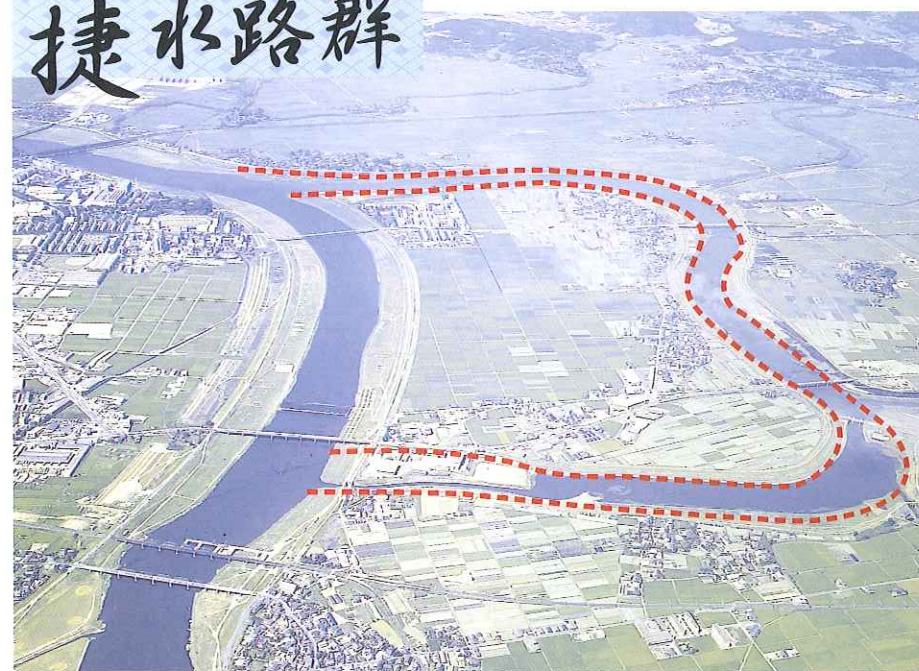


干潮時は、潮（海水）の影響をほとんど受けないため、水は取水口よりも低いところを流れています。満潮時には川を上ってきた潮（海水）が河川水を押上げるため、水位が上昇します。その時の上澄みを取水口からクリークに導いて利用したのがアオ取水です。

●満潮時



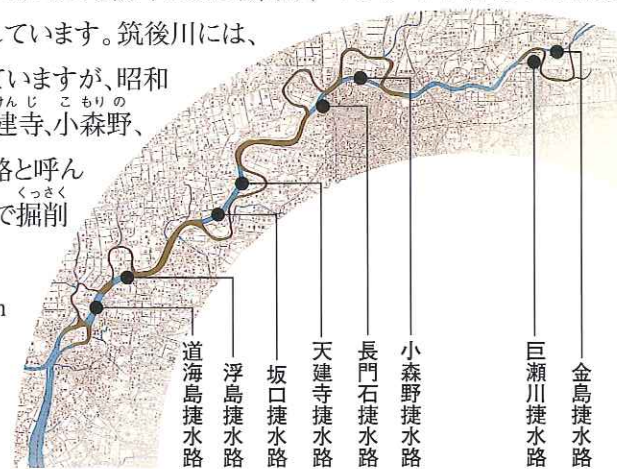
捷水路群



●小森野捷水路（久留米市：昭和初期）

各所で蛇行していた筑後川は、洪水の度にその湾曲部から氾濫し、被害をもたらしていました。そのため、できるだけ水がスムーズに、速く流れるように川を直線的にする捷水路工事（別名ショートカット）が藩政時代から行われていました。新しく掘られた部分には川の流れて川底が削られるのを防ぐために、床固（コンクリートや石などで川底を保護する構造物）が施されています。筑後川には、8つの捷水路が確認されていますが、昭和に入って完成した坂口、天建寺、小森野、金島を筑後川の4大捷水路と呼んでいます。この4つの工事で掘削された土砂は約512万m³。また筑後川の長さは約9km短くなりました。

旧河道



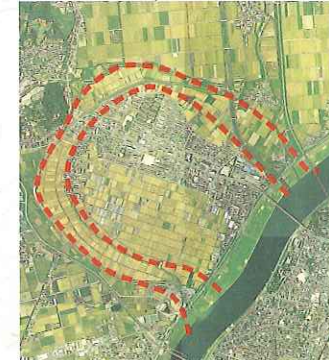
道海島捷水路・浮島捷水路（大川市：藩政時代）



ともに藩政時代につくられたものです。筑後川の下流部は特に蛇行が大きく、氾濫の原因となるとともに土砂の堆積や州の形成もみられました。舟運のさまたげともなるため、川をまっすぐにしました。



長門石捷水路（久留米市：藩政時代）

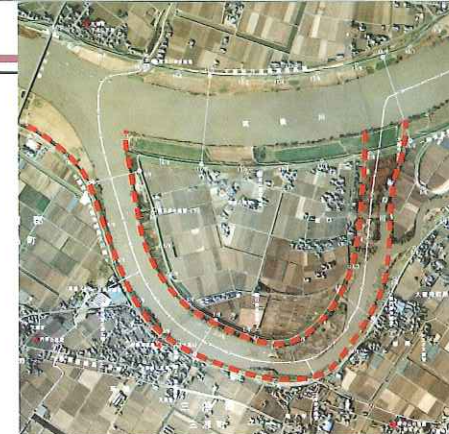


慶長6（1601）年、久留米城主田中吉政の命で掘削された捷水路で、瀬ノ下新川開削とも呼ばれます。それまで長門石を遠回りしていた筑後川を瀬ノ下まで直線で結び、久留米城中の洪水被害を防ぎました。

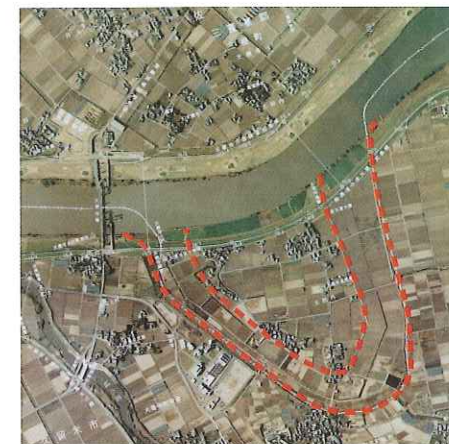
巨瀬川捷水路（久留米市：昭和中期）



巨瀬川は金島捷水路によって切り離された筑後川の旧本川と合流していましたが、金島捷水路と旧本川の合流点の屈曲が著しかったため、巨勢川と筑後川を直接結ぶ捷水路がつくられました。



●坂口捷水路（三根町：昭和初期）

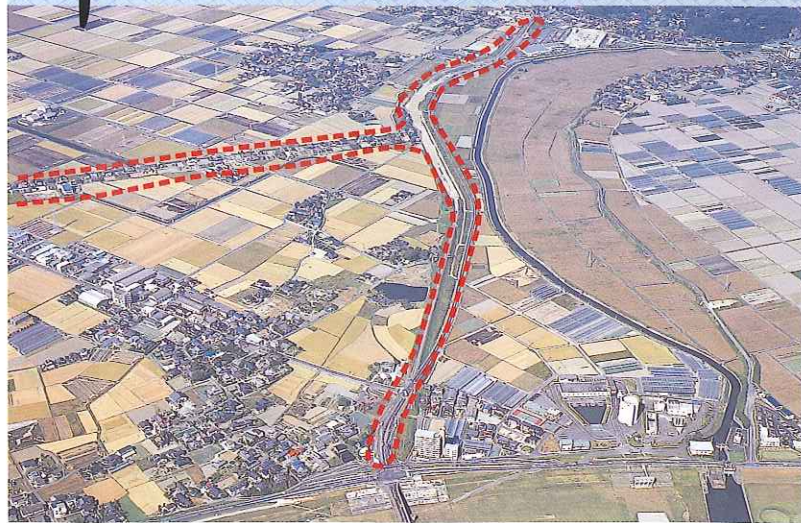


●天建寺捷水路（三根町：昭和初期）

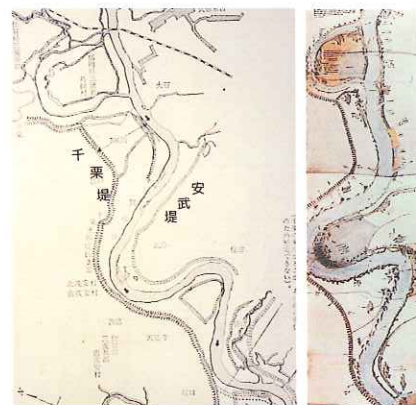


●金島捷水路（北野町：昭和初期）

千栗堤防・安武堤防



●千栗堤防



●文政2年
筑後川絵図

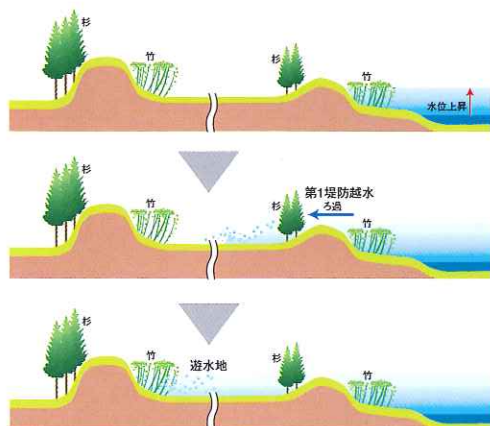
後に新しい堤防がつけられたため、千栗堤防も安武堤防も現在では一部しか残っていません。



●安武堤防

千栗堤防は、およそ350年前に佐賀藩の武士、成富兵庫茂安によって筑後川右岸に築かれたもので、堤防は佐賀県三養基郡北茂安町から三根町に及び、約12kmありました。使われた土の量は、トラックで16万台分、完成までにかかった歳月は12年といわれています。千栗堤防ができると対岸の久留米藩の領地は一層洪水に悩まされることになり、そこでつくられたのが安武堤防です。長さは約4km、その後、1.4kmの堤防が追加してつくられました。どちらの堤防も、人々の暮らしや豊かな農作物を育む筑後平野を守るために活躍しました。

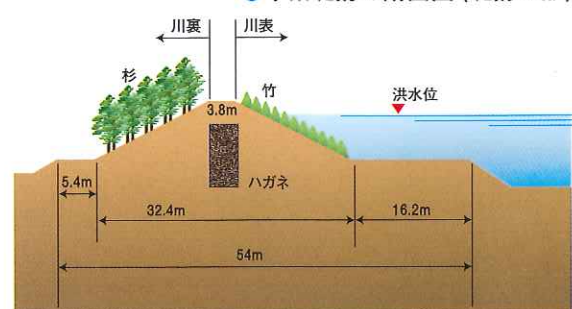
千栗堤防に使われたさまざまなアイデア



堤防は二重になっていて、その間は広いところで180m。これは洪水のときに1番目の堤防をあふれた水を溜めておく場所（遊水地）をつくり、水の勢いを弱めることで2番目の堤防を守り、洪水の被害があまり大きくならないように工夫したものです。

千栗堤防には「はがね」と呼ばれる粘土を突き固めて水がもらないようにした芯が入っています。また、川側には竹を植え、堤防の表面にあたる水の勢いを弱めるようにしています。さらに、反対側には杉を植え、洪水の被害を防ぐ活動のために使えるようにと考えられました。

●千栗堤防の断面図（堤防の形）



なりとみひょうごしげやす

成富兵庫茂安が残した事業

土木事業の先駆者

成富兵庫茂安

成富兵庫茂安は永禄3（1560）年、現在の佐賀市鍋島町で生まれました。佐賀藩主鍋島直茂の侍大将として朝鮮の役などにも出陣した武将ですが、水利治水事業に大きな功績を残しています。その中でも「千栗堤防」、「石井樋」、「蛤水道」などが代表的な事業。また佐賀県の北茂安町や兵庫町という地名に名を残すほど尊敬と感謝を集めています。

蛤水道（東脊振村）



農業に使う水を導くためにつくられた長さ約1,300mの用水路です。田手川の上流脊振山地の蛤岳から筑前の国側に流れる大野川の水を引き入れ、佐賀藩側の田手川下流地域の水不足を解消することが目的でした。しかし、一方では筑前の国の水不足を招き、争いの原因ともなりました。

野越（城原川上流域）



成富兵庫茂安が考えた土木技術のひとつで、堤防や水路、道路などの一部をわざと低くして、大雨などで水が増えた時に、流しきれない水がそこから受堤に沿って、自然に流れ出るようになっています。堤防や水路が壊れるのを防いだり、一度にたくさん水が下流にいかないよう工夫したものです。

水屋・揚げ舟



●鳥栖市高田町に残る水屋



●水屋の石垣

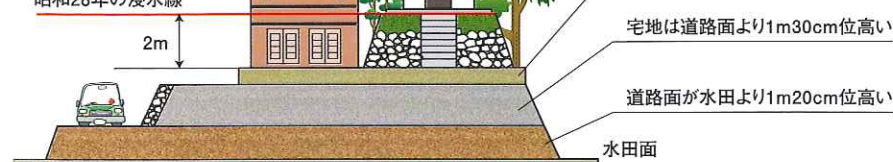
久留米市東合川町や宮ノ陣町、北野町、鳥栖市南部など筑後川の中流域には、支川が合流してくるため、地盤の低い地域がたくさんあります。これらの地域では、洪水に備えて高さ1～2m位の石垣の基礎の上に、つくられた建物が見られます。これは、「水屋」といい、普段は物置として使用していますが、川が氾濫した時には避難場所になります。それでも大洪水の時には危険なので、母屋の土間や倉庫の天井などに避難用の小舟を吊るしてありました。これを「揚げ舟」あるいは「吊り舟」、「作舟」と呼びます。また建物の周りに木々を植えて、洪水時に流木等が激突しないよう工夫した屋敷森を備えた家もありました。



●天井から吊るされた舟

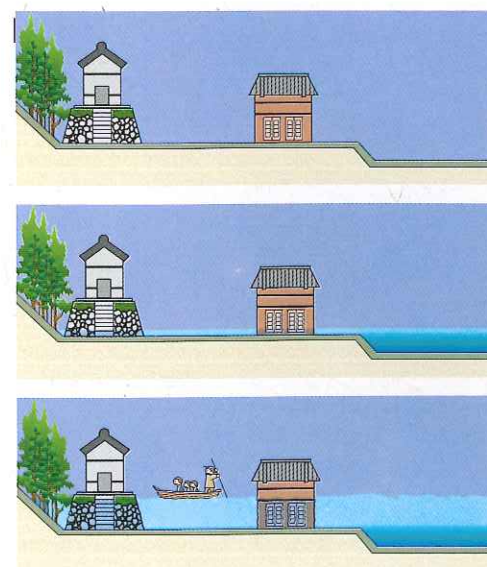
水屋断面図

昭和28年の浸水線

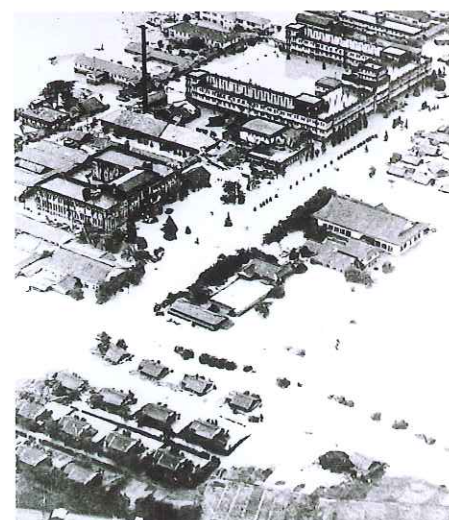


洪水時の様子

- 1 水害の多い地域の住まいは、田畑より一段高いところにつくられていました。
- 2 しかし、それでも大きな洪水の時は、水につかってしまいます。



- 3 そこで、母屋から水屋に船で移動して、洪水がひくまで避難生活をしていました。



●昭和28（1953）年水害時の久留米市街の様子



水屋の内部

水屋の中には、みそや米などの生活用品が収められ、洪水の時でも生活に困らないようしていました。

三基杵水制

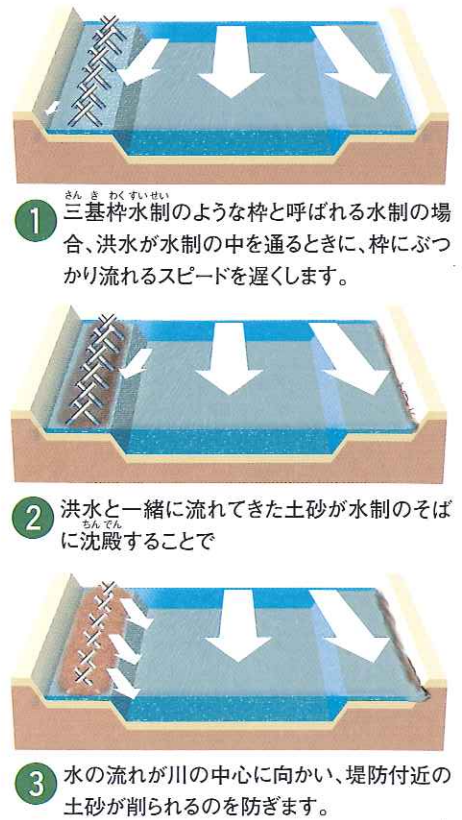


●吉井町朝羽大橋上流付近左岸

筑後川の中流域(47kmから51km付近)には、さまざまな形をしたコンクリート製の水制が見られます。周辺は、昭和28(1953)年6月洪水で、堤防が壊れた部分がほとんどで、その復旧工事の応急対策として設置されたものと思われる。いずれも水の流れを川の中央側にはねだして、河岸を浸食から守るのが役目。昭和30年代後半から、全国的な傾向として根固め工(川岸を守るためコンクリートブロック等でつくる構造物)が施工されるようになり、水制は激減しましたが、最近またその働きが見直されてきています。

■水制のしくみ

水制は川の流れを調節するために設けられる施設です。洪水の流れる方向を変えて、水が堤防に激しく当たるのを防ぐ、堤防の近くで水の流れをゆるやかにする、川の流れる方向を整えて、水深を維持するなど、さまざまな働きがあります。



水制の種類

水制は古くから行われてきた工法で、設置する場所や設置の目的、あるいはその川の特徴などに合わせてたくさんの種類が考えだされています。

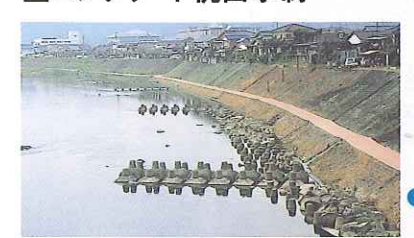
■大聖牛水制



●田主丸町付近左岸

丸太材を三角錐に組み立てたもので、その形が二つの角を持った牛の姿に似ていることから命名されたといわれる牛杵のひとつ。流れの早い川の水が岸にあたる部分に複数で置かれるもので、水の勢いを緩める水はねの効果や、流れの方向を変える効果があります。写真のものはコンクリート材で耐久性を高めています。

■コンクリート杭出水制



●杷木町昭和橋下流右岸

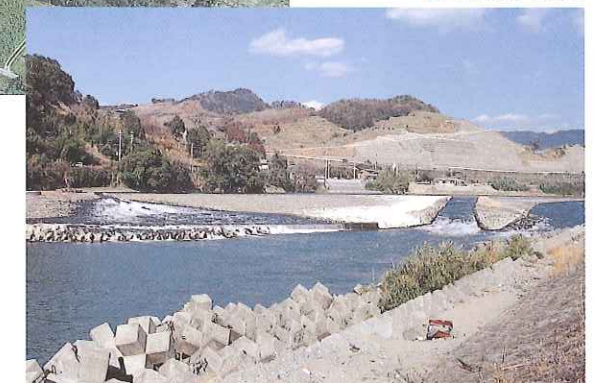
杭を一定の間隔で打ち込む水制で、杭木を使用する場合は、比較的流れが緩やかな川で使用します。水の流れに変化をつける働きがあります。写真の杭出水制は、洪水時に高水敷が水で削られるのを防ぐことを目的に設置されたもので、鉄筋コンクリートでつくられています。

山田堰



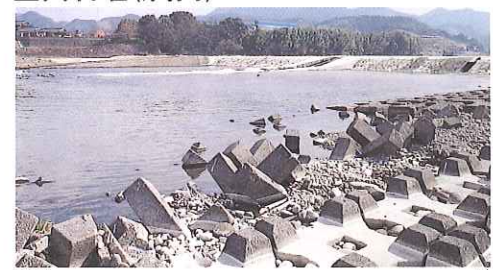
●上空から見た山田堰(朝倉町)

●下流側から望む



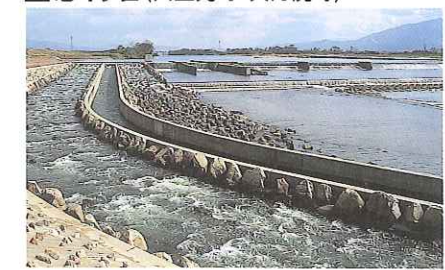
寛文2~3(1662~1663)年の大干ばつをきっかけに、福岡藩によってつくられた堰で、長さは約180m。堀川用水へと水を送り、約700haの水田をうるおしています。筑後川は流れが早いので、工事は大変苦勞し、普通の堰のように川に対して直角ではなく、斜めにせきとめる方法で成功させました。昭和58(1980)年の集中豪雨で流されたために、つくり直されましたが、ほぼ当時の姿を残しています。筑後川には多くの堰がありますが、山田堰は大石堰、恵利堰とともに、筑後川の三大井堰と呼ばれています。

■大石堰(浮羽町)



寛文3(1663)年の大干ばつに困る農民を助けようと、生葉郡(現在の浮羽郡吉井町)の5人の庄屋が命がけで願い出てつくられた堰です。久留米藩の土木技術者丹羽頼母が総監督となって、延べ4万人もの人たちが工事に参加して完成させました。昭和28(1953)年の水害で流され、鉄筋コンクリートで改修されました。

■恵利堰(田主丸町・大刀洗町)



繰り返される干ばつに苦しむ農民を見かねた六右衛門をはじめとする5人の庄屋が、宝永7(1710)年の大干ばつの後、久留米藩の水利・開墾の専門家草野又六の力を借りて、正徳2(1712)年に完成させた堰。工事は非常に困難を極め、ようやく石を積んだ古船を沈めて基礎にすることで成功させました。その後改築され現在は魚が通るための道、魚道が設置されています。

■朝倉三連水車(朝倉町)

山田堰から水を引き入れている堀川用水には、水をくみ上げるための水車があります。18世紀の中ごろにつくられたものといわれ、三連式1ヶ所、二連式2ヶ所。大正末期までは二連式がもう1ヶ所ありました。6月の中旬から10月のはじめまで動いています。日本に残っているものとしては最大の規模で、国の史跡、県の民俗文化財に指定されています。

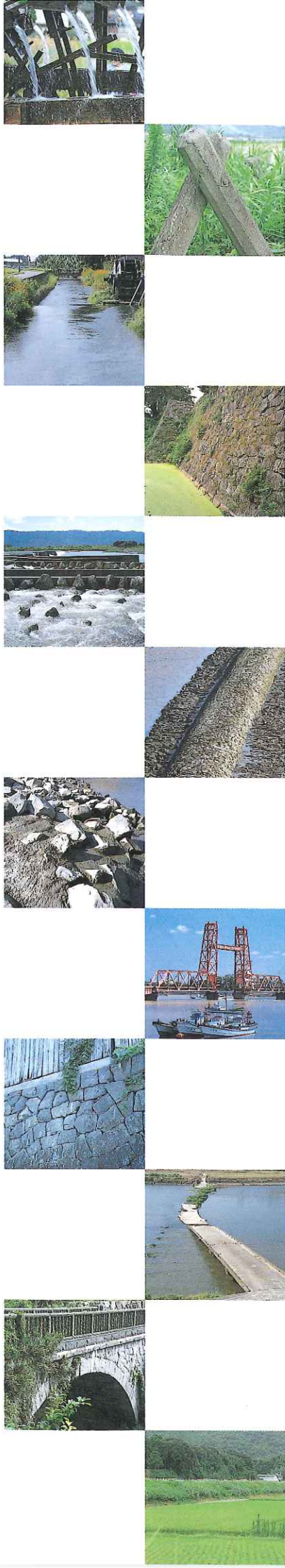
筑後昔ばなし

水ききんからひるさとを 続いた5人の庄屋

昔、吉井町あたりの地域は、筑後川のすぐそばにあるのに、土地が高いところにあるため、田に水をひくことができず、いつも困っていました。そこで山下助左衛門をはじめとする5人の庄屋は、万一失敗すれば処刑されることを覚悟の上、久留米藩に堰と用水路をつくる工事を申し出ました。周辺の農民は昼も夜も休まず働き、2か月余りで完成したのが大石堰。水路を流れる豊かな水を見て、人々は抱き合って喜びました。この5人の庄屋は、堰の近くの長野神社にまつられていて、毎年4月に感謝のお祭りが開かれています。



●長野神社五霊社春の大祭



筑後川の主な歴史的構造物

名称	所在地
1 デ・レーケ導流堤	筑後川河口
2 荒籠	筑後川下流域
3 干拓堤防	東与賀町～佐賀平野
4 佐賀藩三重津海軍所跡	川副町早津江
5 寺井水門	新川合流地点（現在は撤去）
6 昇開橋	諸富町・大川市
7 クリーク	筑後川下流域
8 捷水路群	筑後川中下流域
9 田中吉政碑	大木町土甲呂
10 渡し	現存せず
11 旧埼水門モニュメント	千代田町次郎の森公園
12 野越	城原川上流域：神埼町
13 めがね橋	脊振村東鹿路
14 蛤水道	東脊振村松隈
15 成富兵庫茂安築堤功績碑	三根町東分
16 安武堤防	久留米市安武町
17 千栗堤防	北茂安町千栗～三根町坂口
18 長門石八幡の碇石	久留米市長門石町
19 灌水記念碑	久留米市長門石町
20 水天宮	久留米市京町
21 久留米城掘割	久留米市篠山町
22 沈橋	鳥栖市安楽寺町～久留米市小森野町 他
23 水屋・揚げ舟	鳥栖市高田町、水屋町 他
24 宮入貝供養碑	宝満川：久留米市宮ノ陣町宮瀬
25 筑後川改修工事記念碑	久留米市東櫛原町
26 副堤（控堤）	田主丸町八幡
27 北野天満宮	北野町中
28 稲吉堰	宝満川：小郡市稲吉
29 石浦大橋	久留米市大橋町
30 草野又六碑	久留米市草野町
31 大堰神社	大刀洗町富田
32 輪中堤	甘木市長田
33 恵利堰	田主丸町恵利～大刀洗町八幡
34 霞堤	小石原川、佐田川 他
35 堀川用水	朝倉町古毛周辺
36 朝倉三連水車	朝倉町菱野
37 山田堰	朝倉町山田
38 長野水神社	吉井町桜井
38 三基杵水制	筑後川中流域
38 大聖牛水制	筑後川中流域
39 コンクリート杭出水制	筑後川中流域
40 水はね	筑後川中流域
41 大石堰	浮羽町高見
42 夜明ダム	日田市夜明
43 田栄神社	浮羽町三春
44 日田の川沿いの民家	筑後川、庄手川沿い右岸
45 三隈堰	日田市高瀬～中島町
46 竹田公園人助けの棕	日田市若宮町

引用及び参考文献一覧

「筑後川五十年史」	建設省筑後川工事事務所
「日本の河川」	建設広報協議会
「デ・レーケとその業績」	建設省木曾川下流工事事務所
「わたしたちの吉野川」	建設省吉野川砂防工事事務所
「福岡県百科事典」	西日本新聞社
「佐賀県大百科事典」	佐賀新聞社
「有明海岸環境基本計画」	建設省九州地方建設局他
「筑後川の構図」	水資源開発公団筑後川開発局
「諸富町史」	諸富町
「日本の民俗 佐賀」	第一法規出版
「写真集 筑後川」	九州建設弘済会
「魅どころ九州―土木モニュメントガイド」	建設省九州地方建設局
「成富兵庫茂安」	土木のイメージアップ連絡協議会
「筑後川流域における日本住血吸虫病と宮入貝」	筑後川流域宮入貝撲滅対策連絡協議会
「筑後川の治水と利水」	ぎょうせい
「世界大百科事典」	平凡社
「まちと水辺に豊かな自然を」	リバーフロント整備センター
「川の碑」	山海堂